明治廿六年一月四日 曜日
日本暦 戊戌 (亥、巳)
April 6, 1893.

預金利子引上

一定期預金 六ヶ月以上 年七分五厘
一當座預金 日歩 壹錢八厘
一別口當座預金 日歩 貳錢
一貯蓄預金 年六分六厘

株式會社 東京銀行
東京市日本橋區田所町
電話浪花九一九番

福澤全集

豫約出版 全部五册

本書は新日本文明の開導者たる福澤先生が今を去る廿九年前即ち萬延元年より明治廿六年迄の間にして開國進歩の淵源由來を知らんとするものは必ず一部し傍右に備へざるべからず

本書は約百多數の希望により福澤先生最近の肖像第五卷に挿入す

總紙數凡四千五百頁
菊版形洋裝表紙
總クロース金字入

豫約方法

本書全部の定價拾貳圓にして豫約實價左の如し但滿期後は定價に復す
一本年四月廿五日迄に一時入金のもの……金九圓
一小包郵便料全五册分十里迄三十五錢、百里迄六十錢、百里以外一圓廿錢の見込
但小包郵便の取扱なき地方は何れの郵便局留置にして送本すべきや御送金の際同時に御通知あるべし

發行所 東京京橋區南鍋町二丁目十二番地 電話(編輯用本局一四九番 賣捌用本局三二七番)
時事新報社出張所 大阪北區堂島濱通一丁目四十番屋敷 電話(四九二番)
取次所

精工無比

優美高尚羽織紐より返し〜ふさ付

丸打 平打 組方種々 金一圓廿錢 同 二圓

右發賣致候間澤山御用願上候

東京よし町 電話浪花 一五六番
佐竹組糸店

御遠方御注文の向は御便利を計り郵券代用不苦候

席貸

并に御旅館

御一泊の御方は御一人前金壹圓として料理は御注文に隨ひ上等に調進可仕候間四方の神士御來車の節は何卒御來駕に奉待候

大阪玉造一丁目 呑春樓 真田山西

時事新報第一紙面

時事新報紙面の廣告は一般新聞紙の廣告に比して最も有効なるは今更申す迄もなく殊に其第一紙面は他の紙面に倍して効能著しきより從來同紙面に掲載方依頼の向多く其都度取捨選擇に苦しむよと渉からず依て第一紙面に限り廣告料一行に付金三拾錢申受候也

一行金三拾錢

社說

操縱者は政府か政黨か

議會開場の期に至れば政府と政黨との間に交渉を見るは毎度のみとにして今回も亦その例に漏れざるみとならん自由黨は肝膽相照すとの口實を以て既に味方を約したれども是れは畢竟臨約にしていよ〜本條約を結ぶ場合には必ず種々の條件を提出するみとならん而して其條件は果して如何なるものなる可きか我輩の知る所に非ざれども取る者は成る可く多く取らんみとを欲し與ふる者は成る可く少なく與へんみとを欲するが故に讓るとか讓らぬとか色々面倒なる話しもある可し兵を率ゐすして戰場に臨めば討死か降參の外に道なきは始めより知れ切たるみとなるに然るに當局者が平生其用意を怠りイザ開戰と云ふ急場に至て俄に兵を募らんとするは如何にも不審にして智者の事とは思はれず當局者として左さで分らぬ人物に非ず是式の道理は夙に承知し居るみとならんなれども何分にも從來の行懸りや情實にからまれて斷然方向を一轉するみと能はざるものならん薩長の長老は多年政權を專有して他人の近づくを許さず苟も反抗する者あれば種々の手段を以て鎮壓せんとしたる其反對に民間の有志者は是非とも取て代はらんと欲して人を集め黨を結び極力攻擊し此に相反目する二政派を生じたり斯くて相爭ふ間に政府に於ては民黨の容易に制す可らざるを惱むと共に民黨も亦政府の傷る可らざるを察して互に相近づき其感情も大に和ぎたれども胸中深き所には猶疑の懸るあり而して明に其如の月を見るみと能はず身を以て政黨に投ずるは降參の氣味ありて何となく面白からざるのみか事情に通ぜざる老輩の中には舊夢未だ覺めず暗に政黨を以て同席す可らざる異類とする者もなきに非ず此輩の目より見れば長老にして政黨に入る者は恰も脫走者の如く見ゆるならん目の覺めたる者は最早や政黨の外に依る可きものなきを知れども左ればとて多年の同志者より謀反人と見らるゝも亦心苦しく是に於てか進退に迷ふみとならんなれども時勢に應じて身を處せざるは智者に非ず所謂落閥なるものは尚は多少の餘感なきに非ざれども其下り坂に向へるは遠き以前のみとにして今や殆んど强弩の末勢と云ふも可なり然るに民論の勢は恰も旭の昇るが如くにして當る可らず其天に冲するも遠きに非ず今日にても內閣の運命は政黨の向背に依て定まるの例にして政治通の內には此次の內閣は即ち政黨內閣にして假令ひ藩閥の分子が其間に入るみとあるも唯伴食たるに過ぎざる何しを殘想するもの少なからず左れば政黨操縱とは目下の通語にして政府は恰も藝夫の藝大を使ふが如く政黨を引廻はす樣に聞ゆれども事實は全く反對にして政府みそ却て政黨に左右せらるゝなり時勢は既に變じたり其變遷を知らざるは不明にして知て夢らざるは勇ましきなり區々の情實に拘泥して見苦しき最後を遂ぐるなからんみと我輩の輿も勵告する所なり

奚都奚都、都々奚、だいゑ

神田 熊八

陽氣になつて浮かれて來た所が不圖したみとで福岡さんの御話を聞けば明治の初年に御東征御東幸の事はあつたけれども東都の帝都を江戸に遷したみとはない、東京がいよ〜日本の首府になつて千代田城が宮城になつたのは明治二十一年のみとだと云ふから奚都三十年は間違ひであるが明治元年幕府の滅れたみとは正銘の事實、誰れも見て居る、シテ見ると今度の奚都祭は東京の生れた爲めではなく江戸が斃れて幕府の死んだ年回を勸める供養であらうサア爾うなると愛に大問題が起る凡そ死人の年回は一週忌三回忌七回忌十三回忌二十三回忌三十三回忌等ちやんと極りがあるゆゑ維新の死んだ年回とならば明治二年が一周忌で明治三年が三回忌に當りソレカラ次第々々に今年はハヤ三十三回忌に間もない年だとナゼ三十年祭と節を切つたのか宗旨に色々の流儀はあれども是れまで三十回忌の法事に招待れた者はない出來るみとなら世間並にして貰ひたいがソレは施主の心任せとして扨是れから先きの年回は如何なるか夫れを知りたいと申すは熊八は元來みんな事に錢を出すみとが大嫌ひの癖にみんなドサクサにしけ込んで錢にするには抜目のない積りだ、ソコデ私方に當年七歳になる娘の子がある若し幕府の年回が明治四十年にも勤まるみとなら今から此娘を藝妓に仕立て〜其十七才の花咲りを手古爾にして何處かのデレ助を旨く引掛ける腹案がある所で四十年を抜きにして五十年と飛んだ日には大事な玉も二十七に成つては物に成り兼ねる其處のところが大切だから是非とも先きの事が聞きたい

扨右樣に申しては何だか私が染ッたれのやうに聞えるが是れでも根が神田生れの江戸ッ子だから火事は始終氣になる昨日も時事新報の電報を讀んで聞かして貰へば向河岸の渤海鯛は酷く物騒で膠州町はハヤ燒落ちて旅順町から大連湾町まで火先きが廻つて風次第で日本にも火の粉が飛んで來さうだと云ふサア爾うなれば默つて居られぬ中々奚都の法事どころ所ぢやない熊八も一番向鉢巻で出ます噂に聞けば此火事は唯のポンプぢやいけないさうだ吾々の力で甲鐵艦などは迚も手に及ばないけれども賞めて水雷艇の一艘ぐらゐは用意しなければ神田の魯公も飽度驚いて熊のみとを見直すに違ひない